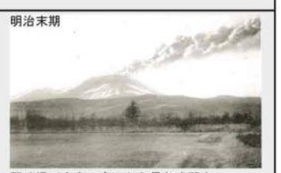
5-3 軽井沢の歴史

明治期から昭和にかけての軽井沢の歴史を幾つかの項目に分けて整理する。別荘文化を把握するための「別荘・ホテル」、土地利用の変遷を把握するための「開発・分譲」、軽井沢から発信された、また軽井沢を舞台とした文学をまとめた「文学者」、「軽井沢の情勢」、「社会」を項目としてあげる。更に、異なる項目同士の関係性を示し、歴史を体系的に整理することで膨大な歴史を構造化することを目指す。合わせて昔の写真資料を収集し、軽井沢町の景観の変遷を示す。

また各歴史的事象を地形図上にプロットすることで、開発された地域や脚光を浴びた場所を整理すると共に、エリア毎の特性を把握する。

軽井沢　年表

※ ○ の数字の場所・事象は、別紙の「歴史的事象の位置図」において位置を示す。

項目	明治時代前期	明治時代中期	明治時代後期
別荘・ホテル	**カラマツ林の始まり** 8 年（1875）　鳥井義処、離山から矢ヶ崎①まで牧場とする。 また、防風林としてのカラマツを植林する。 ↓ カラマツ植林の先鞭 16 年（1883）　雨宮敬次郎、雨宮新田②を開き、カラマツの植林も始める。 17 年（1884）　雨宮敬次郎、離山下に居を構える。 **避暑地・別荘地の始まり** 19 年（1886）　A・C・ショウ、J・M・ディクソン、軽井沢に来る。 ↓ 21 年（1888）　A・C・ショウ、大塚山③に別荘を建てる。	**別荘建築の始まり** 26 年（1893）　代議士 八田裕次郎、日本人初の別荘を建てる。 27 年（1894）　亀屋旅館開業。翌年、万平ホテル⑤に改名。 28 年（1895）　ショー記念礼拝堂建設。 30 年（1997）　ユニオンチャーチ建設。 33 年（1900）　本格的洋風ホテル、軽井沢ホテル⑥開業（旧本陣）。 軽井沢を訪れた外交官・宣教師たち（明治 16 ～ 35 年） カール・ラートゲン（経済学者）、キルベ（貿易商）、ヴェール（青山学院教師） ミス・アレキサンダー（頌栄女学校教師）、ヒュー・フルザー（英国公使館）、 ホワイト（宣教師）、アクネス（宣教師）、ジョンストン（実業家）、 ガビンズ（英国公使館書記）、ダニエル・ノルマン（宣教師）など	38 年（1905）　山本直良、三笠ホテル⑧開業。（軽井沢の鹿鳴館） 39 年（1906）　三泉寮開設（最初の学校寮）。 41 年（1908）　野村龍太郎、平井晴二郎、追分に別荘を建てる。 愛宕山別荘地分譲。軽井沢最初の別荘地分譲。 万平ホテル 軽井沢ホテル 三笠ホテル ※外国人来訪者、別荘建設増加に伴い社交場の整備が始まる
開発・分譲	**道路・鉄道整備** 11 年（1878）　明治天皇ご巡幸のため中山道を修理、拡張する。 17 年（1884）　碓氷新道開通。 20 年（1887）　碓氷馬車鉄道設立。 21 年（1888）　信越線軽井沢一直江津間開業。	26 年（1893）　碓氷峠アプト式鉄道貫通 （上野一軽井沢間全通） 28 年（1895）　日清戦争後の傷病兵診療所開設 →その後の戦争の後も転地療養地となる。 37 年（1904）　山本直良、湯ノ沢一帯⑦を買収。	**スポーツ施設（社交場）の誕生** 40 年（1907）　新軽井沢青年有志により 軽井沢スケート場 開設。 鹿島の森に 野球場⑨ 開設。 41 年（1908）　旧軽井沢パブリックテニスコート八面⑩ 開設。 44 年（1911）　碓氷トンネル、アプト式電化沓掛駅開業。 アプト式鉄道 テニスコート スケート場
文学者	**文学のかかわり** 道路、鉄道の整備により多くの文人が旅の途中で軽井沢を訪れるようになる。 随筆、紀行文等で軽井沢が描かれる。	軽井沢が登場する紀行文・随筆 23 年（1890）　森鷗外「みちの記」を連載。（碓氷峠） 24 年（1891）　正岡子規「かけはしの記」を連載。（碓氷馬車鉄道） 26 年（1893）　徳冨蘆花「碓氷の紅葉」を連載。（碓氷峠） 32 年（1899）　尾崎紅葉「煙霧療養」を発表。 33 年（1900）　小島烏水「浅間山の煙」を発表。（碓氷峠、浅間山） 40 年（1907）　幸田露伴「軽井沢」を発表。	**文化サロンの誕生** 山本直良の妻は有島武郎の妹であり、 白樺派の文化サロンとして利用された。 三笠ホテルを訪れた文化人 志賀直哉、里見とん、柳宗悦、若山牧水など
軽井沢の情勢	天明 3 年（1783）　浅間山大噴火。 死者 1151 名、流失・焼失・倒壊家屋 1000 棟超える。 明治 4 年（1871）　追分に郵便扱所・警察分署を開設。 **製氷業の始まり** 14 ～ 27 年　土屋長次郎、泉喜太郎ら天然氷を始める。 （柳宿、追分、二手橋、矢ヶ崎）④ ※外国人別荘の冷蔵庫に使うため、また中山道の往来客等に販売するため氷の生産が盛んになる。鉄道の開通によりさらに盛んになる。 	37 年（1904）　星野国次、温泉開発着手。沓掛で製材業を始める。 30 年（1897）　軽井沢郵便局事業の開始。 東京一軽井沢間の電信開通。 43 年　大洪水	別荘増加により、別荘用の家具等の需要も急増。 三笠焼、軽井沢彫りが生まれる。 **三笠焼・軽井沢彫りの誕生** 40 年（1907）　山本直良、三笠焼、軽井沢彫等を販売。 その他植林、緬羊の飼育、蔬菜栽培など 地域産業開発に尽力する。 43 年（1910）　東京一軽井沢間の電話線開通。沓掛駅開業。 全町大洪水。 （一ノ字山崩壊、川越石川（矢ヶ崎川）、湯川氾濫）
社会	慶応 3 年（1867）　大政奉還 明治 4 年（1871）　廃藩置県（長野県となる）。	27 年（1894）　日清戦争	37 年（1904）　日露戦争
軽井沢の景観	江戸期の軽井沢 江戸時代、軽井沢は中山道の一宿として開かた。 軽井沢宿、沓掛宿、追分宿の三宿は、「浅間根腰の三宿」とよばれ、殷賑を極めた。 明治初期　軽井沢新道より浅間山を望む	明治 17 年（1884 年）　中山道（現在の軽井沢駅付近） 明治 24 年（1891 年）　軽井沢宿	明治中期　軽井沢町市街 明治 39 年（1906 年）　三笠ホテル　三笠ホテル側から南軽井沢を望む  明治末期　野球場（鹿島の森）から見た浅間山

軽井沢年表（明治時代前期～明治時代後期

※ ○、○ の数字の場所・事象は、別紙の「歴史的事象の位置図」において位置を示す。

大正時代 ／ 昭和時代前期

別荘・ホテル

別荘建築の展開

軽井沢バンガロー建築
A・C・ショーの建てた別荘の旅籠を、洋風に改築した建築スタイルに端を発する。情赤を旨とする宣教師たちの精神がみられる建築。
（明治期）ショーハウス記念館、八田裕次郎別荘、ライシャワー家別荘など。
（大正期）モッス別荘、タムソン別荘、堀辰雄山荘、浄月庵（旧有島武郎別荘）など。

3 年（1914）星野温泉が旅館を開業。

あめりか屋建築（あめりか屋建築会社）
野沢源次郎の別荘分譲と共に発展。約１０年間で、５０棟ほど建築。別荘主には大隈重信、徳川慶久など名士たちが多く、華麗な洋風建築の先駆けなった。

星野温泉

あめりか屋建築

ヴォーリズ建築（主に大正時代）
明治３８年来日、宣教師・実業家・建築家として活躍し、軽井沢では、６０棟以上を建て、約２０棟が現存。
6 年（1917）カナダ人アンドリュース別荘。
7 年（1918）軽井沢ユニオンチャーチ改築。
9 年（1920）ヴォーリズ別荘。
大正末　アームストロング別荘など。

レイモンド建築（主に昭和初期）
大正中期、帝国ホテルの建築のため来日、日本で多くの建築家を育てた。
軽井沢では 10 数棟を建築、数棟が現存。
6 年（1931）レイモンド スタジオ別荘。
8 年（1933）アトリエ「夏の家」。
10 年（1935）聖パウロ教会など。

軽井沢と皇室

宮家の別荘建築
大正末から昭和の初めにかけ次々に建てられ、後にホテルとなり建て替えられる。
大正 11 ～ 12 年に朝香宮、摂政宮が避暑。15 年には北白川宮が別荘建築（宮家で初めての別荘を建築）。
昭和 2 年（1927）からは竹田宮、朝香宮、伏見宮が、相次いで別荘を建築。

開発・分譲

星野温泉と共に発展

雲場池周辺に上流階級向けの別荘地開発

4 年（1915）野沢組の野沢源次郎が川田竜吉の土地を譲り受け、“野沢原”[1]周辺を分譲地開発開始。
雲場池を中心に、旧軽井沢初のゴルフ場[3]、プールや野球グラウンドなどの開設。同時に、200 万本のカラマツなどの植林を行い、並木道を整備。
→“ハイカラ・高級”リゾートを構築。

共に発展

観光名所の整備
8 年（1919）近藤友右衛門が碓氷峠周辺を買収、観光地整備に着手（見晴らし台、遊歩道など）

千ヶ滝周辺でのホテル・分譲
12 年（1923）大衆向けの「土地付五百円別荘」分譲。
グリーン・ホテル[5]完成。

南軽井沢でのホテル建設
昭和 11 年（1936）押立山ホテル。[5]
13 年（1938）南軽井沢大観楼（ホテル）。[6]

千ヶ滝と南軽井沢開発

7 年（1918）堤康次郎、千ヶ滝遊園地会社 設立し千ヶ滝[4]の開発に着手。
（後の箱根土地会社　※現：西武グループ）
別荘開発は離山を越え西、南へ広がる。道路、電気、水道、バス運行などのインフラを同時に整備し、”中流階級”のための別荘地開発。

大正 12 年（1923）千ヶ滝、南軽井沢で土地付き別荘分譲開始。
14 年（1925）南軽井沢飛行場開設。
南軽井沢二十間道路[5]を建設（昭 10 年完成）。
昭和 3 ～ 6 年（1928 ～ 1931）上の原[1]、芹ヶ沢[2]で分譲地開発。
馬越原[3]（南軽井沢）に軽井沢競馬場開設。
8 年（1933）南ヶ丘に、全 18 ホールのゴルフ場[4]完成。
→現：軽井沢ゴルフ倶楽部

文人にも影響　訪れる文人が増える

草津電気鉄道の発達
12 年（1923）信濃追分駅開業。
15 年（1926）草津電気鉄道　草津―軽井沢間 開通。

交通の整備
2 年（1927）東京～軽井沢間、定期連絡飛行の開始。
3 年（1928）草津～軽井沢間、定期バス運転開始。

文学者

星野温泉を中心に文学の展開

7 年（1918）軽井沢通俗夏季大学 の開設。
（総裁は後藤新平、会長は新渡戸稲造博士）
※アカデミズムと実業の交流をめざし開設される。気鋭の文学者、実業家などが宗教、経済、科学など様々な講演を行い新しい、学問の喜びを人々に提供した。
［星野温泉を訪れた文人：与謝野寛・晶子、内村鑑三、土井晚翠、吉田絃二郎など］

大正時代頃～　文化人の避暑地化
8 年（1919）堀辰雄「美しい村」
10 年（1921）北原白秋「落葉松」
※軽井沢≒カラマツのイメージの定着
12 年（1923）有島武郎　情死

軽井沢の文学を残した文人（大正時代）
堀辰雄、有島武郎、芥川龍之介、室生犀星、正宗白鳥、北原白秋、内村鑑三、中野重治、土井晚翠、与謝野寛・晶子、吉田絃二郎など

浄月庵（旧有島武郎別荘）

昭和時代頃～　別荘を持つ文人が出始める

軽井沢の文学を残した人（昭和初期）
志賀直哉、川端康成、田中冬二、阿部知二、岸田國士、寺田寅彦、立原道造、横光利一、丸岡明、長谷川伸など

軽井沢の情勢

軽井沢の自治組織の発達

2 年（1913）軽井沢避暑団（戦前に軽井沢会となる）設立。
※キリスト教宣教師ら（プロテスタント系）を中心につくられた避暑地の自治組織。
5 年（1916）軽井沢避暑団　財団許可
設立目的：情報の交換、親睦の場所の維持等。
［テニストーナメント、コミュニティコンサート、お別れ会等のイベント運営、軽井沢サナトリウムの運営、会員維持のための名簿作成等　（1930 年前後）］

9 年（1920）軽井沢ゴルフ倶楽部設立（会長　徳川慶久）
12 年（1923）町制を施行、東長倉村を軽井沢町と改称。
※大正 12 年を機に、社会に“軽井沢”が広く知れ渡り始める
15 年（1926）軽井沢郵便局で別荘に番号をつける。

2 年（1927）浅間山麓で白菜栽培が盛んになる。
15 年（1940）旧軽井沢中央通り大火。
（罹災２８世帯、全焼１５戸、半焼３戸）
4 年（1929）軽井沢上水道完成。
8 年（1933）軽井沢観光協会設立。
東京帝国大学「浅間火山観測所」開設。
10 年（1935）軽井沢乗馬倶楽部設立。

社会

大正時代～　大正デモクラシー
3 年（1914）　第一次世界大戦
9 年（1920）　国際連盟加入
12 年（1923）　関東大震災
6 年（1931）　満州事変
8 年（1933）　国際連盟脱退
14 年（1939）　第二次世界大戦

軽井沢の景観

大正時代
軽井沢新道より浅間山を望む

大正時代
離山を望む牧場（土壌牧場）

大正時代
愛宕山別荘地

大正 2 年（1913 年）
軽井沢市街

大正 8 年（1919 年）
万平ホテルから浅間山を望む

昭和 2 年（1927 年）
野球試合の様子（オーステンホテル裏）

昭和 5 年（1930 年）
軽井沢市街

昭和 11 年（1936 年）
開発 50 周年パレード

軽井沢年表（大正時代～昭和時代後期

※ ○ の数字の場所・事象は、別紙の「歴史的事象の位置図」において位置を示す。

昭和時代後期

別荘・ホテル

軽井沢と皇室の変遷

大戦中　皇室の旧軽井沢への疎開

戦後　昭和天皇皇后両陛下　軽井沢での避暑滞在
30 年（1955）　三笠宮別荘、三笠に新築。天皇皇后、プリンス・ホテルに宿泊。
32 年（1957）　**天皇皇后両陛下　テニスコートのロマンス**
34 年（1959）　天皇陛下 御成婚

近代建築

35 年（1960）大江宏別荘
37 年（1962）吉村順三別荘
39 年（1964）アサマ・モーター・ロッヂ（海老原一郎）
46 年（1971）軽井沢プリンス・ホテル新築（黒川紀章）
51 年（1976）軽井沢町立図書館（三輪正弘）
54 年（1979）軽井沢セミナーハウス（内井昭蔵）
57 年（1982）軽井沢プリンスホテル新館（清家清）

吉村順三別荘

疎開地となる軽井沢

ホテル・別荘が外国人の疎開先となる

19 年（1944）　押立山ホテルと大観楼が八丈島島民の疎開を受け入れ。
万平ホテルにドイツ人疎開。
20 年（1945）　三笠ホテルは外務省分室になる。
グリーン・ホテル、三笠ホテル、万平ホテルや
各大別荘はアメリカ人の保養施設になる。

開発・分譲

戦後の広がる開発

ホテルの再開と復興

22 年（1947）　国土計画会社、朝香宮別荘を譲り受けプリンスホテルとして営業。
24 年（1949）⑧晴山ホテル開業。
27 年（1952）　万平ホテル、三笠ホテル返還。
45 年（1970）　三笠ハウス廃業（旧三笠ホテル）。保存運動がおこる。
60 年（1986）　旧三笠ホテル国指定重要文化財。
61 年（1987）　追分宿郷土館新築。

冬季の観光客の誘致開発

27 年（1952）　冬の観光のためスケートリンク五箇所開設。
⑨南軽井沢湖完成（現：廃湖）　夏のボート、冬のスケート
30 年（1955）　第一回スケート競技大会。
31 年（1956）　千ヶ滝に西武百貨店軽井沢店開店。
千ヶ滝軽井沢スケート・センター開設。
36 年（1961）⑪塩沢湖完成　スケートなどのレジャー開発

晴山ホテル

レイクニュータウン

７２ゴルフ場

新しい別荘地、観光地化・広がるゴルフ場

23 年（1948）　国土計画会社が**三度山一矢ヶ崎別荘地**⑦開発。
35 年（1960）　石井新人、国土開発（株）を設立し、**レイク・ニュータウン**⑩開発。
40 年（1965）⑪**森泉郷別荘地・ゴルフ場**開発
41 年（1966）⑭**晴山ゴルフ場**開設。
46 年（1971）⑮**軽井沢７２ゴルフ場**開設（旧地蔵ヶ原）。

文学者

戦禍を避け、軽井沢に疎開する文人

軽井沢に疎開した文人たち
室生犀星、正宗白鳥、野上彌生子、沖野岩三郎など

※外国人が多く集まる軽井沢は安全であると考えられ、
多くの財界人や文人が疎開した。

大戦後～　仕事場として別荘をもつようになる

別荘を持つ文人
阿川弘之、石坂洋次郎、石川達三、井上友一郎、井上靖、円地文子、
大原富枝、川口松太郎、小島政次郎、瀬氏鶴太、佐多稲子、柴田錬三郎、
芹沢光治良、丹波文雄、北条誠、水上勉、吉屋信子、横溝正史など

軽井沢の文学を残した文人（昭和後期～平成）
高浜虚子 、中村真一郎 、佐藤春夫 、野上彌生子 、三島由紀夫 、谷川俊太郎 、
福永武彦 、尾崎士郎 、岸田衿子 、室生犀星 、阿部知二 、丹波文雄 、
円地文子 、加藤周一 、遠藤周作 、後藤明生 、加賀乙彦 、宮本輝 、
南木佳士 、大江健三郎 、小池真理子 、水村美苗など

軽井沢の情勢

16 年（1947）　軽井沢、外国人の強制疎開地に指定される。

26 年（1951）　軽井沢国際親善文化観光都市建設法公布。
28 年（1953）　軽井沢文化人協会発足。翌年「軽井沢文化協会」に改称。
地元住民と別荘に住む人々が共通の文化を一緒に作り上げてゆきたいというのが創立の理念。

（26 年（1951）　沓掛大火　143 棟焼失）
→ 27 年（1952）　中軽井沢区画整理着工。

※ホテル・旅館経営の合理化をはかるため、冬季の外客誘致につとめた。

36 年（1961）　東京ー軽井沢間の電話即時通話となる。
⑫茂沢南石堂遺跡発掘。
41 年（1966）　軽井沢駅前区画整理、対策協議会発足。
61 年（1986）　保健休養地軽井沢１００年記念。

社会

20 年（1945）　第二次世界大戦終戦
21 年（1946）　日本国憲法公布
31 年（1956）　国際連合加盟
39 年（1964）　東海道新幹線開通
東京オリンピック開催
→軽井沢：馬術競技場
47 年（1972）⑯浅間山荘事件

軽井沢の景観

昭和 20 年代後半（1950 年代）
夏の軽井沢

昭和 30 年代（1950 年代後半）
旧軽井沢ロータリー

昭和 40 年代（1960 年代後半）
夏の軽井沢

昭和 48 年代（1973）
軽井沢駅前

昭和 53 年代（1978）
旧軽井沢

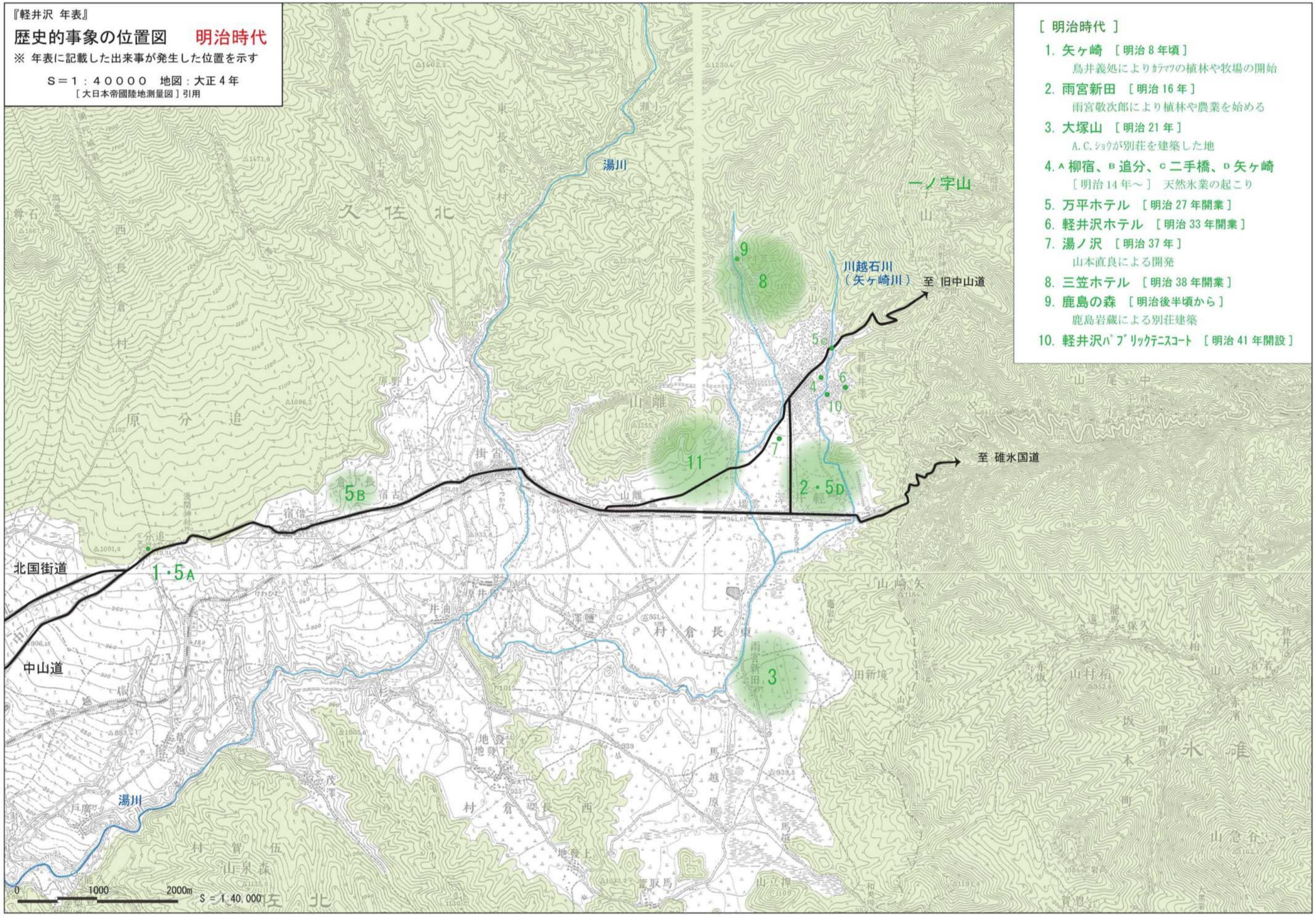
軽井沢年表（昭和時代前期～昭和時代後期）

『軽井沢 年表』

歴史的事象の位置図　明治時代

※ 年表に記載した出来事が発生した位置を示す

S＝1：40000　地図：大正4年
［大日本帝國陸地測量図］引用



［ 明治時代 ］

1. 矢ヶ崎　［明治8年頃］
   鳥井義処によりｶﾗﾏﾂの植林や牧場の開始
2. 雨宮新田　［明治16年］
   雨宮敬次郎により植林や農業を始める
3. 大塚山　［明治21年］
   A.C.ｼｮｳが別荘を建築した地
4. A 柳宿、B 追分、C 二手橋、D 矢ヶ崎
   ［明治14年～］　天然氷業の起こり
5. 万平ホテル　［明治27年開業］
6. 軽井沢ホテル　［明治33年開業］
7. 湯ノ沢　［明治37年］
   山本直良による開発
8. 三笠ホテル　［明治38年開業］
9. 鹿島の森　［明治後半頃から］
   鹿島岩蔵による別荘建築
10. 軽井沢ﾊﾟﾌﾞﾘｯｸﾃﾆｽｺｰﾄ　［明治41年開設］

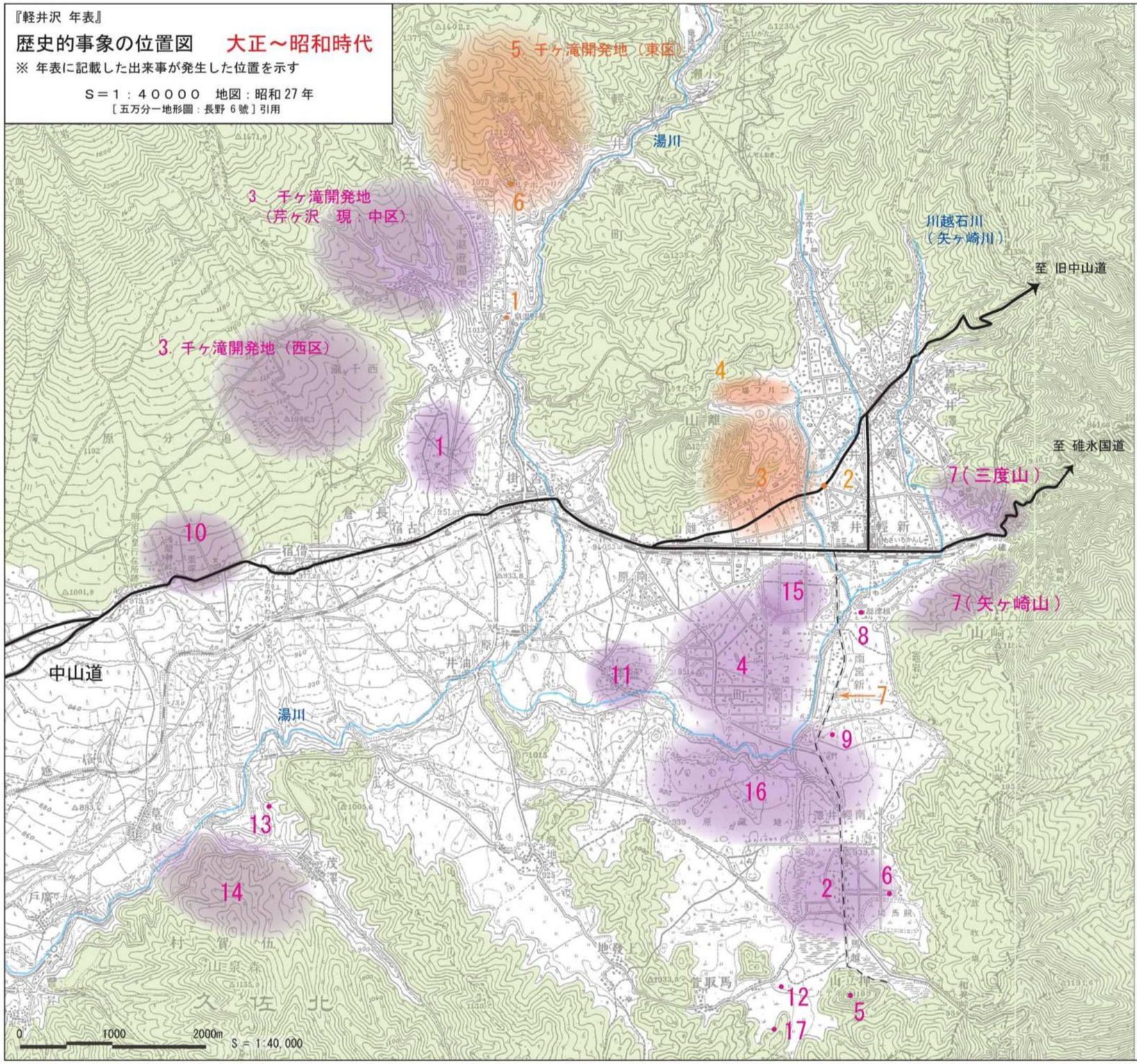
歴史的事象の位置図（明治時代）

『軽井沢 年表』

歴史的事象の位置図　大正～昭和時代

※ 年表に記載した出来事が発生した位置を示す

S＝1：40000　地図：昭和27年
［五万分一地形図：長野 6號］引用



［ 大正時代 ］

1. 星野温泉旅館　［大正3年開業］
2. 野沢原　［大正4年］
   野沢源次郎による開発
3. 旧軽井沢ｺﾞﾙﾌ倶楽部　［大正8年開設］
   長野県初のｺﾞﾙﾌ場
4. 千ヶ滝周辺　［大正7年］
   堤康次郎による開発
5. グリーン・ホテル　［大正12年開業］
6. 南軽井沢二十間道路　［大正14年貫通］

［ 昭和時代 ］

1. 上の原周辺　［昭和3年頃］
   箱根土地会社による別荘開発
2. 馬越原　［昭和6年］
   競馬場開設、その他ｺﾞﾙﾌ開発など
3. 芹ヶ沢・千ヶ滝西区周辺　［昭和6年頃］
   箱根土地会社による別荘開発
4. 南ヶ丘周辺
   （昭和8年　新ｺﾞﾙﾌ場（18ﾎｰﾙ）完成）
   →現：軽井沢ｺﾞﾙﾌ倶楽部
5. 押立山ﾎﾃﾙ　［昭和11年開業］
6. 南軽井沢大観楼　［昭和13年開業］
7. 三度山・矢ヶ崎山　［昭和23年から開発］
8. 晴山ホテル　［昭和24年開業］
   →現在の軽井沢ﾌﾟﾘﾝｽﾎﾃﾙｲｰｽﾄ
9. 南軽井沢湖　［昭和28年完成］
   スケート場などの観光地開発
10. 大日向
    満州引揚げ者による開拓
    昭和28年カトリック教会開設など
11. 塩沢
    塩沢湖（昭和36年完成の人造湖）を中心にした
    レジャー開発　→昭和34年から民宿営業開始
12. レイク・ニュータウン　［昭和35年開発］
13. 茂沢南石堂遺跡　［昭和36年発掘］
14. 森泉郷　［昭和40年開発］
    別荘地、ゴルフ場の開発
15. 晴山ゴルフ場完成　［昭和41年］
16. 地蔵ヶ原周辺
    ゴルフ場開発など（昭和47年 軽井沢72ｺﾞﾙﾌ場開設）
17. 浅間山荘事件　［昭和46年］

歴史的事象の位置図（大正～昭和時代）